

令和 5 年 6 月 15 日現在

機関番号：12602

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2022

課題番号：20K02178

研究課題名(和文) 歯科口腔疾患を患う市民のQOL向上を阻むコミュニティにおける障壁に関する研究

研究課題名(英文) Research on barriers in the community that prevent the QOL of citizens with dental and oral problems.

研究代表者

鶴田 潤 (Tsuruta, Jun)

東京医科歯科大学・統合教育機構・准教授

研究者番号：70345304

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：2023年2月に歯科治療と日常生活での障壁に関するWebアンケートとして、3年以内に歯科医療を受診した者を対象とし1,108名より回答を得た。約3割が日常生活に悪い影響を受けた経験や外食時に困った経験を有しており、歯科治療による課題でQOL向上が阻まれている方たちの存在が示唆された。介護食等の充実も認められ、社会の対応として歯科・口腔保健状況が良好となる一方で、今後、ノーマライゼーションの概念のもと、個々の市民の生活の質をより向上するためには、口腔領域において問題を感じるこれら少数割合への対応の検討も必要であると考えられた。コロナ禍行動制限の影響で期間中未完の研究計画は引き続き進める予定である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

我が国の歯科口腔保健の状況は良好な水準にあるが、歯科治療を受療した患者の数が多くも事実である。本調査では、歯科診療を受けた経験のある調査対象者において、歯科治療を受けた結果により日常生活での悪い影響(食事制限や外見、口臭等)を経験した者が一定数の存在(約30%)することが示唆された。また、口腔内状況に関しての他者との関わりについて、一定数の者が他者の口腔内状況に興味を示すなどの結果が得られた。QOL向上、健康寿命延伸などの実現に向け、本研究成果は、新たな観点で、口腔に関する諸問題を抱える市民の存在を認知しており、それらへの対応(専門的、社会的)を提起する基礎的調査として意義があると考えられる。

研究成果の概要(英文)：A web-based survey on dental treatment and barriers in daily life was conducted in February 2023, with 1,108 respondents who had received dental care within three years. Approximately 30% of the respondents had experienced a negative impact on their daily life or experienced problems when eating out, suggesting that there are people whose QOL improvement is blocked by problems caused by dental treatment. While the dental and oral health situation has improved as a result of society's response, including the improvement of nursing food, it was considered necessary to consider how to respond to these minority groups who experience problems in the oral area in order to further improve the quality of life of individual citizens under the concept of normalisation in the future. The research project, which was not completed during the period due to the effects of the Corona-19 pandemic, will continue to be carried out.

研究分野：歯科医学教育

キーワード：ノーマライゼーション オーラル・ノーマライゼーション

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

我が国では、歯科口腔疾患の指標の一つである80歳での残存歯数は改善方向にあり、近年、歯・口の機能低下から始まる「オーラル・フレイル」の予防活動、健康寿命延伸への8020運動等、社会的な予防啓発活動が実施されている。この背景には、適切な歯科治療が多くの国民に提供されてきた事実があるが、その結果、歯周病罹患、欠損部位への補綴物については、高齢者(65歳以上)の多くが歯周病に罹患、「補綴物(義歯)」を利用している現状も事実である。若年、高齢者問わず、一度義歯装着となれば、一生涯、義歯利用者となる。慢性疾患として歯周病や咀嚼機能障害については、管理状況により口臭の発生、発語のしにくさ、食形態の調整など、健常者には生じない悩みが伴う。これらの長期にわたる治療や義歯が必要な市民に対して、その悩みに対する能動的な社会的取り組みは存在していない。「社会で生きるための基本」となる食事、会話に関係し、周囲からの視線・対応により不自由を感じることで、クオリティ・オブ・ライフ(QOL)の低下につながることで、歯科医療現場では事実として受け止められており、診療現場では、「口臭があると聞かれたくないので、ガムをいつも食べている」、「入れ歯だから友達と一緒に部屋に泊まれない」、「義歯だけは恥ずかしいから絶対いやだ」などの声を聞くことが多い。口腔内は、他人が見ることも気づくことも難しい部位であり、歯科口腔疾患の中でも、短期的な処置で対応されるう蝕(むし歯)治療などとは異なり、長期継続的に患う慢性的な疾患があるのも事実である。慢性的な疾患により生じる身体的変化・特徴(審美的特徴、臭い、発語不良、食形態要調整等)について、社会的な理解を深め、現実的な対応の導入は、真の意味での健康寿命の延伸につながるものとして期待される。歯科医療の現場での最善の歯科治療に加え、受け止め側であるコミュニティの理解を通じてこれらの課題を解消することが新たな社会のあり方につながると考える。つまり、診療室から生活の地域(コミュニティ)に戻った市民(患者)が歯科口腔疾患・義歯利用などに起因する障壁に対し、「ノーマライゼーション」の理念を導入し、課題を解決していくということが新たな社会課題として求められるものと考えた。

### 2. 研究の目的

高齢者を含む市民について、義歯利用者や歯科口腔疾患の治療を受けた患者が帰属するコミュニティでの受入状況や日常生活での障壁の存在、QOL向上に必要な社会的基盤(コミュニティ・施設・対応)のあり方を調査し、根拠データの分析・解決策の提示、外食産業を含む社会的基盤整備(施設・対応)につながる研究を社会福祉的な観点を導入し実施することで、超高齢社会の国民のQOL向上に必要な課題抽出を行い、社会へ新たな対応策を提示することを目的とした。

### 3. 研究の方法

2020年度、2021年度については、新型コロナウイルス感染症パンデミックの影響により、対人関連の調査が行えない状況であったため、文献調査として、障害・パリアフリー・ユニバーサルフリーに関する書籍、関連論文および学会参加により、口腔に関する情報収集などを実施した。2022年度については、後期より対人関連の調査が可能となったため、2023年1月にタイにおける歯科診療への一般的理解の基礎調査、2023年2月に歯科診療経験のある一般市民を対象とし、文献調査成果を参考に作成したアンケート項目にて、歯科治療と日常生活での障壁に関するWebアンケート(16項目:選択式,自由記述,マクロミル)を行った。回答に同意をした3年以内に歯科医療を受診した者を対象とし20~60代それぞれ200サンプルを予定し実施した。

### 4. 研究成果

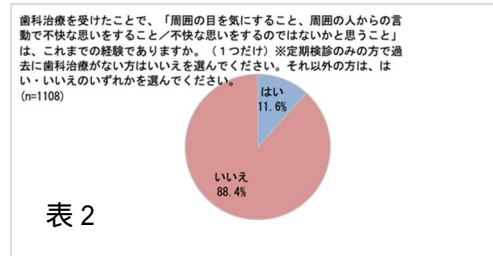
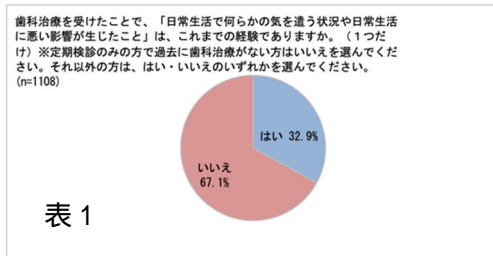
#### 1) 研究成果概要

2022年度Webアンケート調査において、過去3年以内に歯科診療の経験がある1,108名からの回答を得た。「歯科治療を受けたことで「日常生活でなんらかの気を遣う状況や日常生活に悪い影響が生じた」には、はい:365名(32.9%)、「外食時に、歯・お口の中の状況により困った経験」には、はい:371名(33.5%)、「外食提供の場での口腔内状況に応じての配慮への希望」には、いいえ:1,029名(92.9%)であった。「友人に、あなたの歯・お口の中のことを指摘された際の感情」には、「恥ずかしい」665名(60.0%)であった。約3割の回答者が日常生活に悪い影響を受けた経験や外食時に困った経験を有しており、歯科治療による課題でQOL向上が阻まれている方たちの存在が示唆された。高齢者を対象とした介護食などの充実も認められ、総論的には歯科・口腔保健状況が良くなるなか、今後、個々の市民の生活の質を向上するためには、これら少数割合への対応の検討も必要であると考えられた。国外(タイ)での基本調査からは、歯科保健制度により提供される歯科診療範囲が変わり、患者の歯科診療への意識が変わる可能性が示唆され、日本での歯科診療の次の目標として、心理面、ハード面でのパリアフリー、オーラル・ノーマライゼーションにつながる調査が引き続き必要であると考えられた。2022年度末までの計画であったが、新型コロナ

ウィルス感染症の影響で実施できなかった計画(タイ歯科医師へのインタビュー・外食産業担当者への調査、シンポジウム)について、2023年度補助期間終了後においても、引き続き、研究実施を行う予定である。

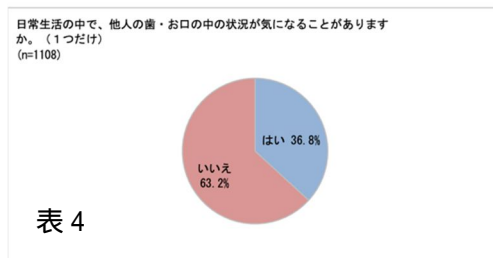
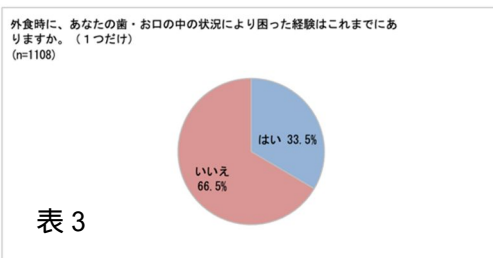
## 2) 2022年度実施 Web アンケート調査結果

Web アンケート調査結果については、回答者 1,108 名、男：479 名 (43.2%)、女：692 名 (56.8%)、平均年齢 44.8 歳であった。現在自覚している口腔内の問題(複数回答)については、約 30%は特になしであり、むし歯、歯茎の問題が約 30%であった。歯科治療を受けたことで、「日常生活で何らかの気を遣う状況や日常生活に悪い影響が生じたこと」へのこれまでの経験については、経験あり：365 名 (32.9%)、経験なし：743 名 (67.1%) であり、回答者のうち一定数の者が経験を示した(表 1)。具体的な回答としては、差し歯・詰め物に



関する食べ物(ガム等)の回答が多く、その他、矯正治療による食べ物の問題、差し歯の色調・審美性、マウスピースの装着感、親知らずの治療などが挙げられた。

歯科治療を受けたことで、「周囲の目を気にすること、周囲の人からの言動で不快な思いをすること/不快な思いをすることではないかと思うこと」へのこれまでの経験については、経験あり：129 名 (11.6%)、979 名 (88.4%) であり、回答者の約 1 割が経験を示した(表 2)。具体的な回答としては、矯正器具・銀歯による審美性(笑えない、歯が茶色い、器具が嫌など)、口臭、滑舌などが挙げられた。外食時に、あなたの歯・お口の中の状況により困った経験については、経験あり：371 名 (33.5%)、経験なし：737 名 (66.5%) であり、回答者の一定数の者が経験を示した(表 3)。具体的な回答としては、矯正治療中・差し歯による



食事に関する制限、歯並びによる食渣停滞、舌切除による問題などが挙げられた。日常生活の中で、他人の歯・お口の中の状況が気になるかどうかについては、はい(気になる): 408 名 (36.8%)、いいえ(気にならない): 700 名 (63.2%) であり、回答者のうち一定数の者が気になると回答した(表 4)。友人が、取り外し式の入れ歯を使っていることに関する感情・行動については表 5、友人が、周囲が気がつくような口臭であった場合の感情・行動については表 6、友人に口腔に関する指摘をされた場合の感情については表 7 の結果となった。

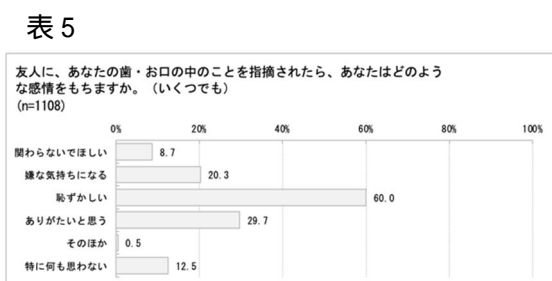
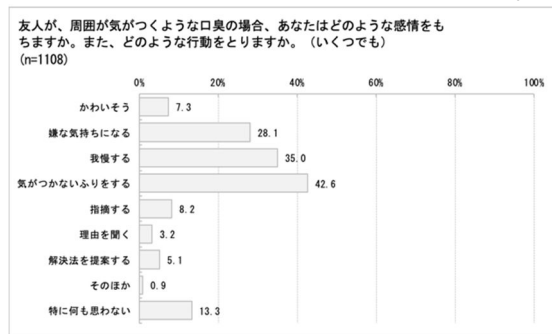
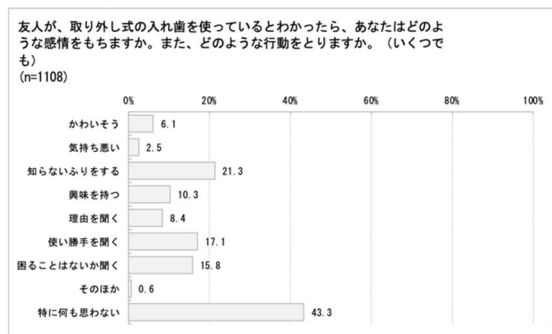


表 7

本アンケートについては、過去3年以内に歯科診療の経験がある1,108名からの回答を得た。歯科治療による日常生活へ影響を与える経験について、その約3割に経験がある結果であり、その内容としては、差し歯・詰め物に関する食べ物(ガム等)の制限の回答が多く、その他、矯正治療による食べ物の制限の問題、差し歯の色調・審美性の問題、マウスピースの装着感、親知らずの治療による影響などが挙げられており、日々の食生活に関わる内容、診療器具の装着による違和感や外観への懸念など、痛みなどとは別の観点での影響があることが明らかとなった。また、歯科治療を受けたことにより周囲からの目を気にすること、言動他に関係しての不快への経験については、約1割に経験がある結果で、その内容としては、矯正器具・銀歯に関して、人前で笑えない、人に見えてしまうなどの審美的問題が多く挙げられ、他に、滑舌が悪い、口臭に関する問題が挙げられていた。歯科診療器具や診療箇所に関して見た目が、周囲からの目を気にすることとなり、心理的な影響を及ぼしていることが示唆された。これら日常生活への影響、不快に関する経験の結果からは、矯正治療器具(ブラケット、マウスピース)や差し歯・詰め物など、取り外し式(可撤式)義歯に限らず、歯科診療に係る診療器具や保険診療で扱われる一般的な補綴物などの影響が示唆された。外食時の困った経験については、約3割が経験を有していたが、その内容としては主に差し歯や矯正治療による食事に関しての制限であり、硬い物や粘着質の食べ物を食べることができない、歯の間に詰まるなどの問題であった。ほか、知覚過敏などの原因で、熱い・冷たいなどの温度に関わる問題が挙げられていた。この点については、自宅などでの日常の食事では、自分自身の口腔の状況に合わせた食形態を選択できる点と外食での一律の提供形態の相違が関連しているかなどの調査を今後進める必要があると考えられた。

他者との関係に関しては、回答者の約3割が他人の口腔内状況が気になると回答しており、その対象としては、口臭、黄ばみ、歯並びなどが多く挙げられていた。友人がその場合にどう思うか・どうするか、という仮定ケースへの回答(複数回答)として、友人に「口臭」があった場合には、「気づかないふりをする」が約4割と最も多く、次いで「我慢をする」、「嫌な気持ちになる」、「特に何も思わない」であり、対人関係として、受動的な感情・行動を取る回答が見られた。積極的な関係としての「指摘する」などの回答は、いずれも1割以下であることから、状態については気になるものの、対人関係の現状維持を優先するような感情・行動を取ることが考えられた。また、友人からの指摘については、6割が「恥ずかしい」と回答しており、対人関係において、口腔内状況の話題については、受動的な感覚が強いものと考えられた。

今回のWebアンケートからは、歯科治療により日常生活に影響があると感じる者が回答者の一定の割合としていることが明らかとなった。QOLの向上の目的で、今後、それらの影響に対する対応の必要性、方法などを検討することへの基礎的情報が得られたと考える。また、口腔領域に関する他者との関係について、一定の割合で、他者の口腔内状況について気になる者がいることやその関係性、対応に関する基礎的情報が得られたことで、他者の口腔内状況に対する理解を深め、互いの状況を受け入れ生活を送ることができるオーラル・ノーマライゼーションへの展望が開けたものと考えられる。

制限：本調査においては、3年以内に歯科診療の経験がある対象者からの回答を得た。そのため、近年に歯科診療を経験していない者など、歯科診療から離れている者とは異なり、歯科診療に一定の経験や理解のある者であると考えられる。そのために、本調査の結果を一般化する解釈には限界があると考えられ、一般化については、さらに対象を広げた調査を進める必要があると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 鶴田 潤
2. 発表標題 歯科患者の日常生活での口腔内状況に関する障壁について 一般市民の意識調査
3. 学会等名 第64回日本歯科医療管理学会総会・学術大会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------